しろあとだより

第22号
2021年3月
高槻市立
しろあと歴史館

目次

「高槻城主高山氏の動向と「かくれキリシタン」の成立」
中西裕樹 ……1

高槻城主高山氏の動向と「かくれキリシタン」の成立

中西 裕樹

一 はじめに

摂津国島下郡の山間部にあたる千提寺・下音羽（ともに大阪府茨木市）において、「かくれキリシタン」の遺物が確認されてから約一〇〇年が経過した(1)。その信仰の背景として、戦国時代の周辺地域がキリシタンの高槻城主高山右近（洗礼名ジュスト）の支配を受けたことに大きな異論はないだろう。

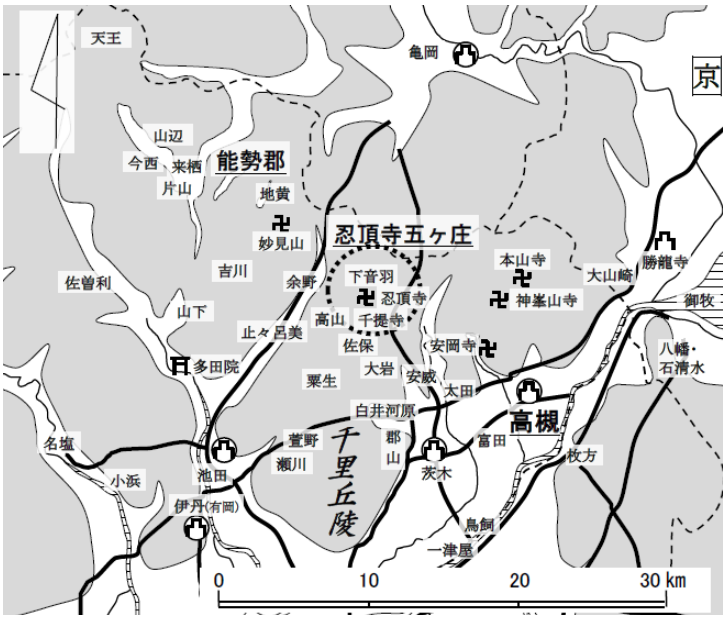

図 小文に登場する地名の位置（点線の円内はおよその忍頂寺五ヶ庄）

戦国時代の畿内では、浄土真宗や法華（日蓮）宗という戦国仏教が民衆の間に浸透した(2)。高山氏領が存在した摂津国は、本山の大坂本願寺を核とした浄土真宗のメッカであり、法華宗の諸本山が所在した京都にも近い。このような地域でキリスト教が展開したのは、高山氏の主導する布教が当初は地域社会のリーダーであった土豪層が担い、後には強制ではないにしても高槻城主の意向によったことが一因だろう(3)。

天正十三年（一五八五）閏八月、高山氏は羽柴秀吉によって播磨国明石（兵庫県明石市）へと移され、キリシタンに動揺をもたらした。以降の支配者の変遷や天正十五年の伴天連追放令で宗教的環境は大きく変化し、やがて戦国仏教が旧高山氏領の地域社会に定着する。しかし、千提寺・下音羽では「かくれキリシタン」の信仰が続いた。

中世の千提寺・下音羽は、「忍頂寺五ヶ庄」という荘園に属した(4)【図】。忍頂寺は下音羽の南東にあたる竜王山（標高五一〇m）の麓に所在する山岳寺院で、中世には京都の仁和寺（真言宗）の末寺であった。その範囲は茨木市域の上・下音羽村、忍頂寺（寺辺）村、銭原村、佐保村、泉原村に及び、忍頂寺村は車作・安元・生保・大門寺・大岩・千提寺を含む。また、近世初頭には高山氏の本拠であった高山村（大阪府豊能町）などを加えて「五ヶ庄」と称され、周辺の島下郡山間部は一定のまとまりをみせた。

島下郡の山間部、また他の旧高山氏領の他の集落でも「かくれキリシタン」の信仰が存在した可能性はある。ただし、千提寺・下音羽のキリシタン遺物は高山氏支配の時期ではなく、禁教後の十七世紀中頃までの年代観を示し、かつ有名なフランシスコ・ザビエル像などの優品を含む。これは、ある時期に千提寺・下音羽が「特別」になったことを予見させる。

高山氏以降、江戸時代初期の地域社会と権力動向までを見通す当該地域の信仰については、フーベルト・チースリク氏(5)、井藤暁子氏が詳細な考察を加えている(6)。もはや多くが論じられたが、高山氏の動向については近年に理解が進んだ事象が多い(7)。

チースリク氏は忍頂寺五ヶ庄に後述する能勢郡を加え、宣教師が記述し

た「山間部」の布教ととらえた。そして、高槻城主以前からの高山氏による布教を一連の動きとして扱う。ただし、高山氏の立場は村落の土豪から地域を支配する大名へと大きく変化し、山間部でも布教のあり方は異なった。井藤氏は千提寺・下音羽の「かくれキリシタン」の家ごとの来歴や周辺環境を丹念に洗い出して地域史を掘り下げたが、高山氏段階の布教に関する言及は少ない。

これらの意味で考察には余地があり、そもそも千提寺・下音羽における「かくれキリシタン」の成立と継続の理由は考え続けなければならないテーマである。そこで、小文では高山氏周辺の権力動向が大きく変化した天正十年以降を対象とし、宣教師らの記録から具体的な布教内容と背景、キリシタンの動きなどを確認しながら、千提寺・下音羽での「かくれキリシタン」の成立を考える一作業としたい(8)。

二　高槻城主の動向とキリシタン

(一)　摂津山間部の布教と教義の理解

天正十年(一五八二)五月の本能寺の変で織田信長が討たれた後、山崎合戦で羽柴秀吉方についた高山右近は戦後に摂津国能勢郡で三千石、近江国で千石を得た(9)。信長を失った安土(滋賀県近江八幡市)のセミナリヨ(神学校)は高槻へ移転し、すでに高槻教会は司祭のフォルナレッティや修道士のヴィセンテ洞院らが常住するレジデンシアに昇格していた。このセミナリヨには、天皇の従兄弟「ウエノ殿」の子もいたという(「一五八三年度、日本年報」)。高槻は独立した小教区となり(10)、ルイス・フロイスが引用した次のフォルナレッティ書簡からは、高山氏が能勢郡を含む摂津国山間部で布教に力を入れた様子がうかがえる。

私は神学校のことで引き続き忙しく、しかも一人のために、改宗のことにかかわる時間が殆どない。よって、このような仕事が好きな二、三の司祭を早急に助けに派遣されることが極めて必要とされている。というのも(派遣されれば)他のことをする暇がないのは確かである。現在私は、この二、三日間に二千六十五名に洗礼を授けに新しい土地に行った。そこは昨年羽柴筑前殿が(高山)ジュスト右近殿に与えた土地である。また千名以上が洗礼を待っている別の幾つかの場所があるが、彼らを教化する人がいないので、私には助けに行けない痛みと悲しみが残る。私は、そこにいるジュストの父のダリオがそれらの土地の各所に、いかにして十字架や教会を建てるかの指図を出すのを、そのままにして置くだけで、聖なる洗礼を受ける前に、そこにあった悪魔の寺院がつぶされた。これらの者は、ずっと前から、彼ら自身の動機で我らの教えを聴くことを望んでおり、理解してからキリシタンになろうとする者で、間違いなく、門より入るであろう。

(一五八五年八月二十七日付フロイス書簡)

多忙なフォルナレッティは個人の改宗に時間が割けず、新たな宣教師の派遣を望んでいた。その中で「昨年羽柴筑前殿が(高山)ジュスト右近殿に与えた土地」に出向き、二、三日間で二千六十五名に洗礼を授けたとある。この記述から、天正十年に右近が得た能勢郡において、翌十一年に短期間の集団洗礼があったことが知られる。『日本史』第二部三九章によれば、右近の父・高山飛騨守(洗礼名ダリヨ)が能勢の新たな「家来たち」の改宗を図ってフォルナレッティや日本人修道士らと赴き、二千人以上が入信したが、フォルナレッティの多忙を理由に改宗事業は持ち越された。

また、千名以上が洗礼を待つ別の幾つかの場所では、飛騨守の指示を受けて寺院を破壊する人々がおり、以前から聴聞を望み、教義を理解した上で入信しようとしていたという。寺院破壊はキリシタン「予備軍」だからと説明されるが、単に高山氏に従った人々の行為のようにも見える。

続いて、同じく高山氏が主導した布教を示す「一五八三年度、日本年報」の記述について、長くなるが引用したい。

過ぐる(一五)八三年に一司祭がヴィセンテ修道士を伴って、ジュストの支配下の山のキリシタンたちを訪ね、同所におよそ一ヵ月滞在した。彼らは(従前)あまり教化に与ることができなかったので、デウスのことについてはまったく白紙のような状態であったが、修道士の適切かつ明瞭なる説教によって彼らは十分に理解して喜びと悟りを新たにした。この訪問において二百三十余人が新たに洗礼を受けた。ジュストの領内にいた仏僧たちは信長が生きていた頃、決して我らの教えを聴くこともキリシタンとなることも望まなかったが、ジュストは彼らの許に人を遣わし、(説教を)随意に聴くこと、ならびに(これによっても)理解せぬ者は(他に)生活を求めること(を命じて)彼らの希望を奪ったので、全員が決心して百人乃至それ以上の数の仏僧がキリシタンとなった、領内にあった

神と仏の寺院はことごとく、役に立たぬものは焼き、また破壊し、適当なものについてはこれを用いて教会を建立した。その中に津の国の忍頂寺と称するはなはだ有名な寺院があったが、今では同地方で最良の教会の一つとなっている。同地方にあった偶像に対して行なわれた破壊ははなはだしく、その内の多数は仏僧たちがかなり以前から隠していたものであったが、たちどころに破壊された。かつて崇拝されていたことの罰としてさっそく、台所の薪やこれに類する他の用に供せられた。

（「一五八三年度、日本年報」）

能勢郡の集団洗礼と同じ天正十一年、一司祭とヴィセンテ修道士が「山」という場所に一か月滞在した。高槻教会の司祭であるから、フォルナレッティのことだろう。この地のキリシタンはデウスに関する知識がなく、今回の説教で教えを理解、悟りを新たにした。以上の記述は、教義の理解には一定期間の説教が必要で、逆に能勢郡のように短期間で洗礼を受けたキリシタンらの理解が「怪しい」ことを示唆している。

続けて、信長存命中、高山氏領内の僧はキリスト教への改宗は拒めたが、天正十一年に右近が圧力をかけた結果、百人以上の僧がキリシタンとなった。寺院や仏像は破壊を受け、忍頂寺が教会の一つに転用されたという。一連の文脈において忍頂寺が登場するため、「山」の場所とは同寺周辺、つまり忍頂寺五ヶ庄と考えて良いだろう。

また、以下でも取り上げるように、近世初頭にかけてイエズス会の記録では、「山」「山間部」にいる信仰心の強いキリシタンが特記される。本節で見たように、山間部と言っても能勢郡と忍頂寺五ヶ庄とではキリシタンの信仰に対する成熟度は大きく異なった。以降の「山」も忍頂寺五ヶ庄と見て差し支えない(11)。なお、先のフォルナレッティ書簡にも「悪魔の寺院がつぶされた」とあり、こちらも忍頂寺を示すように思える。

(二) 忍頂寺の破壊と布教の背景

忍頂寺の仏僧が信長死後までキリシタンにならずに済んだ理由として、フーベルト・チースリク氏は同寺が永禄十二年(一五六九)に信長から寺領安堵を得たため、右近が信長に遠慮した結果としている(12)。ただし、信長が摂津で寺領安堵を出すのは上洛翌年のこの頃までで、以降は荒木氏や高山氏ら摂津の支配者が安堵の主体となるため、遠慮の理由が明確ではない。そこで、ここでは天正六年(一五七八)に右近と茨木城主中川清秀との間で起きた忍頂寺五ヶ庄と淀川べりの一津屋(大阪府摂津市)をめぐる相論に注目する。

当時の摂津は、離反した荒木村重を信長の軍勢が攻撃する戦時体制下にあり、翌天正七年に丹羽長秀ら織田家の武将が忍頂寺五ヶ庄を右近の知行と裁定した。忍頂寺には、寺領の「五ヶ庄百姓中」に対し、右近が年貢納入を命じた文書が出されている(13)。本文書は年紀を欠くが、花押は当該期に右近が使用した形であり、事実上の右近による寺領安堵は、今回の相論の結果を受けて出された可能性が高い。

戦国期の摂津では、千里丘陵を境目に以東の島上・島下郡が「上郡」、以西の豊島・川辺郡等が「下郡」と呼ばれ、政治的にも異なる地域社会を形成した。高山氏が上郡の領主層を基盤とした和田氏の後継勢力であるのに対し、中川氏が下郡の領主層を基盤とする池田氏の後継勢力であり、元亀二年(一五七一)には和田・池田氏の勢力が千里丘陵周辺で競合したことを一因に郡山合戦が起きている(14)。和田氏が敗北した結果、この後に下郡の勢力が上郡に進出し、天正六年当時は中川氏が茨木周辺で勢力を拡大して高山氏との衝突が起きてもおかしくない状況にあった。

コリン著の『高山右近伝』によれば、天正十年頃に仏僧らが清秀に働きかけ、信長の右近に対する信用を失わせようとした。これに失敗すると、今度は山伏らが大和の大峰山で右近を呪詛するが、清秀が天正十一年に戦死すると、山伏らもキリシタンになったという(15)。右近に揺さぶりをかけて清秀に接近する仏教勢力は両氏の係争地、つまり勢力の「境目」に所在する可能性が高く、そのような場で山伏らの修験者が拠る密教系寺院は忍頂寺しか見当たらない。

天正十一年の高山氏が主導する領内の布教は、能勢郡ではわずか二、三日間の集団洗礼であったのに対し、忍頂寺五ヶ庄では多忙な宣教師が一か月間も滞在する布教となった。高山氏にとって同庄は天正六年に織田政権の裁定で獲得した地域であるが、忍頂寺が対立する中川氏と結んで反発していた。一連の動きは、高山氏が「境目」地域の自立的な在地有力寺院の否定と住民の掌握を意図し、中川氏当主の戦死というタイミングで寺院破壊とセットで周到なキリスト教の布教という手段を講じたとまとめられるだろう(16)。結果、住民や僧侶は受容し(せざるを得ず)、根本的に教義

を理解するキリシタンが誕生した。

かつて永禄七年(一五六四)以降、高山氏は自身の本拠地である高山(大阪府豊能町)で布教を進め、隣郷の余野(同前)や止々呂美(大阪府箕面市)では日本人のロレンソ修道士が四十日間と長期滞在している。しかし、今回のフォルナレッティの滞在と単純な比較はできない。教義を説くのが日本人修道士と外国人司祭という違いも大きいが、「はじめに」でもふれたように高山氏は土豪から高槻城主へと立身し、この時点の布教は地域支配者の動向とリンクする。高山氏領内にはキリスト教が広がっており、布教に対する人々の感じ方も異なったと思われる。

(三) 高山氏転封と宗教的環境

天正十三年(一五八五)閏八月、摂津国大坂を本拠とする羽柴秀吉は一族で畿内を固める政策をとり、高山氏は播磨国明石へ転封されて多くの家臣が従った。来る九州攻めを控え、遠隔地の情報や人脈に通じたキリシタン大名への期待が込められた転封であったが、高山氏領のキリシタンは高山氏に加え、キリシタンの土豪たち(高山氏家臣)も失うことになった。「一五八八年度・日本年報」には、次のような記述がある。

日本では領主が移封され追放されると、彼らとともに貴人や兵士たちもまた移封され追放されることになる。その土地に残るのは商人と農民だけである。彼らは新たにやってきた異教徒の領主のもとに入り、教会や司祭とは無縁の生活を送ることになる。そうして彼らは自分たちの領主に追従するを余儀なくされ、やむにやまれずデウスの律法を放棄してしまうか、そうでなくとも少しずつ信仰に冷淡になってゆく。

(「一五八八年度・日本年報」)

これは、高山氏が高槻から去った際の状況がこの通りだろう。翌九月には、秀吉一族の羽柴小吉秀勝が高槻から近い安岡寺に右近と同様の寺領安堵の文書を発給し(17)、翌年には転出するが新たな高槻城主となった。一部の旧高山氏領は秀吉の直轄領となって代官支配がはじまり、十月には忍頂寺五ヶ庄に近い勝尾寺(大阪府箕面市)や箕面寺(瀧安寺。同前)に安威重胤(五左衛門。後に摂津守)が年貢安堵の文書を出した。この前後の状況を記す「一五八五年十月三十日付セスペデス書簡」を紹介したい(18)。

高槻の教会、ならびに右近殿の領内のすべての聖堂は筑前殿の指示により、神父たちの意志にまかせ、彼らは望むならそこに留まり、またキリシタンたちを更に世話してもよい。そして誰人といえどもこれを妨害してはならぬ、ということになった。(中略)そしてセミナリヨをこの大坂へ移し、目下ここにある。特に山の百姓たちは、神父たちが彼らのもとに留まらぬであろうとたいへん心配していたが、彼らは信仰の堅固さを証拠だて、また後日、背教するようなことがないという期待を抱かせたので、オルガンティノ神父は今までどおり、ヨセフ「・フォルナレッティ」神父を高槻に残すことに決めた。そして今、彼はヴィセンテ修道士および数人の同宿と共に同地に居る。(中略)筑前殿は右近殿の旧領地の大部分の代官すなわち管理人として右筆安威殿という善いキリシタンを任じた。彼の管理の許におかれた地域には、かの山間部のキリシタンの大部分が含まれている。そして我々は神の恩寵をもって容易に彼らを保持することができるだろうと希望を抱いている。

(一五八五年十月三十日付セスペデス書簡)

秀吉(筑前殿)は、高槻のセミナリヨと教会の存続をイエズス会に委ね、特に「山の百姓たち」が宣教師の退去を憂慮する中、同会を束ねるオルガンティーノはこの後も彼らの信仰が続くと判断し、高槻教会へのフォルナレッティの残留を決めた。これは反面で、他の旧高山氏領のキリシタンには棄教の可能性があるとイエズス会が判断したことを示唆している。この差は「山の百姓たち」の信仰の堅さに求められ、前々節で見たように「一五八三年度、日本年報」では、忍頂寺五ヶ庄周辺を「山」として表している。つまり、「山の百姓たち」とは、教義までをしっかりと理解する忍頂寺五ヶ庄のキリシタンと考えて良い。

また「安威殿」が安威重胤を指す。島下郡安威(大阪府茨木市)を拠点とする国人安威氏の一族とみられ、重胤は高山氏旧臣で天正十二年に受洗したキリシタン(洗礼名シモン)であった(19)。入信から日は浅いものの、秀吉は旧高山氏領でのキリシタン保護を指示し、意図的に重胤は代官にした。高山氏の旧主和田惟政はキリシタン保護を掲げたが自身の信仰は禅宗であり、これは家臣に多くのキリシタンがいたための方針であった(20)。秀吉によるキリシタンへの配慮も円滑な地域支配を念頭に置き、高山氏転封後も旧領の宗教的環境は何とか保たれた可能性が高い。

三　忍頂寺五ヶ庄と領主の再編

（一）伴天連追放令の影響

天正十五年（一五八七）に九州攻めを終えた秀吉は、博多で伴天連追放令を発した。その目的は禁教令ではなく宣教師の国外退去にあったが、秀吉は大名や側近に禁教、一部のキリシタンの家臣には棄教を強制した。伴天連追放令に関わる伊勢神宮蔵「御師職古文書」の天正十五年六月十八日付覚は「伴天連門徒之儀者、一向宗よりも外ニ申合候由被聞召候」にはじまり、かつての一向宗（浄土真宗）門徒が大名の支配に従わずに天下の差し障りとなったとしている。「一五八八年度・日本年報」には、秀吉の言葉という次の一文がある。

貴殿らの教法はすなわち日本の諸侯の栄誉と存在を危うくするものだ。神々とはわが国では諸侯以外のなにものでもなく、彼らはその偉大さと勝利のゆえに神として崇められるようになった。今や日本の諸侯はかつて他の諸侯がそうしたように、できる限りの力を尽くして神になろうとしている。それゆえ伴天連たちの弘める教えが神に反するものである以上、それはすなわち日本の諸侯とも相容れぬものだといってよい。その教えはなるほど他のところでは結構なものだろうが、日本ではそうではない。余が伴天連たちを追放した所以である

（「一五八八年度・日本年報」）

秀吉は、自身を頂点とする支配を「神」と表現し、宣教師が説く教えはこの「神」に従わない人々と認識したという。豊臣政権にとっての九州攻めは初の本格的な遠征であり、勝利の後に秀吉はキリシタンにどちらの「神」を選ぶのかを迫ったのではないだろうか。周知のとおり、右近は秀吉を選ばず、大名の地位を失って追放された。

伴天連追放令により、畿内でも宣教師は追放、関連施設の閉鎖が進む。「一五八八年度・日本年報」には「都の諸地方の神学校もその他多くの修道院や司祭館もろとも破壊され焼かれてしまっていた」とあり、「ついにかのキリシタン宗団は堰を切ったように崩れ去った」という。しかし、『日本史』第二部一〇〇章は、次のように記す。

かつては（高山）ジュスト右近殿の領地であったが、今は暴君の直轄領となっている高槻領の大部分の管理人であるシモンと称せられるキリシタンの願いによって、オルガンティーノ師は、ダミアン・マリン師に対し、（高槻の）山間部のキリシタンの許で働き、その地のキリシタンたちの世話をするようにと命じた。そこのキリシタンたちは、右近殿が去った後、そこのほとんど全領地が、異教徒の主君や管理人に支配されるようになったので、甚大な損害を被るに至った。そうした障害のために、当然のことながら、司祭たちはキリシタンたちの世話をできなかったから、彼らの間では信仰の弱い者が続出し始めた。とりわけかつて一向宗の門徒であった人々がキリシタン信仰に動揺をきたしたのであるが、ダミアン・マリン師が到着したことによって彼らは強い信仰を取り戻し、ふたたびキリシタンの数は増加し、彼らが久しく待望していたように司祭がそこに定住することになって、一同は大いに喜び、かつ満足した。だが誰にも増してその喜びを深く感じたのは、ロケと呼ばれ、すでに年老い、かつ非常に善良なキリシタンであった。彼はかつては仏僧で、清水と称せられる一寺院の長を勤めていた。その寺院は今では教会に用いられている。

（『日本史』第二部一〇〇章）

伴天連追放令の後、安威重胤（シモン）はオルガンティーノに働きかけ、ダミアン・マリンが「山間部のキリシタン」を担当することになった。非キリシタン武将の支配の下では宣教師の巡回に支障が生じ、かつての浄土真宗門徒を中心に動揺が生じていた。しかし、ダミアンの「到着」で信仰は持ち直す。そして、とりわけ「清水」という寺院の長であった「ロケ」という年老いたキリシタンが喜びを示したという。

このロケに注目したのが、井藤暁子氏である(21)。清水寺とは竜王山東麓の車作村で複数の坊院を擁する忍頂寺関係の寺院であり、井藤氏はロケを後の千提寺の「かくれキリシタン」関係者とみている。ダミアンが赴いたのは、やはり忍頂寺五ヶ庄であった。また、『日本史』同章によれば、ロケがいる土地のキリシタンはダミアン定住以前も堅固な信仰を保ち、ロケは自身を含む仏僧らによる搾取を悔恨と説教していたという。

（二）重視される忍頂寺五ヶ庄

天正十八年（一五九〇）、河尻秀長が勝尾寺に対して年貢安堵の文書を発給した（「勝尾寺文書」）(22)。これは忍頂寺五ヶ庄を含む豊臣家代官の交代を示し、秀長を「摂津茨城」一万石とする記録もある（「廃絶禄」）。す

でに旧高山氏領に加え、かつて多くのキリシタンがいた河内での信仰は「小さな葡萄の房が葉陰に取り残されているのがかろうじて見出されるかのよう」な状態であった。しかし、このことを記した「一五九一、一五九二年度・日本年報」は、別に信仰を守る人々の存在を記す。

かつて(高山)ジュスト(右近殿)に属した(高槻)領内では、すべて農民からなるキリシタンで、彼らは農業や技芸によって生活を営んでいたが、同じ信仰心をもって精進し、信仰を棄てぬだけでなく異教徒たちが来て住むことを断じて許さぬほど団結していた。彼らはそのようにして維持してきたが、領主たちは異教徒であっても、彼らが堅く決心しているのを知り、彼らとそれ以上面倒を起こすことはしなかった。また彼らの頭となっている二人の者がいた。その一人はジョウチンといい、他の一人はロケと言った。

（「一五九一、一五九二年度・日本年報」）

場所の記述はないが、「農民」という記述や信仰への強い姿勢をふまえると、ここでのキリシタンも忍頂寺五ヶ庄の人々ではないだろうか。ロケの名前もこれを傍証するように思う(23)。ダミアンの姿は確認できないが、彼らは信仰を核として排他的な姿勢もみせていた。このため、「領主」の河尻秀長らも彼らの信仰を黙認したのだろう。

同年には、イエズス会の巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノが天正遣欧少年使節を伴って二度目の来日を果たし、翌天正十九年には上洛して秀吉と対面した。秀吉の態度は軟化しはじめ、まもなくオルガンティーノとフランチェスコ・ペレス、ヴィセンテ洞院ら三人の日本人修道士の他、三〇人の在京が認められた(一五九四年九月二十九日付オルガンティーノ書簡)。高山右近も秀吉と対面し、イエズス会に遅れて来日したフランシスコ会は京都に教会が許された。そして、文禄四年(一五九五)のオルガンティーノ書簡には、次のようにある。

今年になって私は二度大坂、堺、高槻に居住しているキリシタンたちを訪問し、また山間地に住んでいる人々をも訪問した。しかし特に山間に住んでいる人たちは素朴で単純であるために悔悛（の秘蹟）の効果では目立たなかった。なぜなら彼らにあっては、デウスのすぐれた恩恵の効果が目に見えて表われ、皆は驚くほどの和合によって互いに結ばれており、謙遜、従順、敬虔で、日常の祈りの勤行を果たすために毎日二回は教会に詣でに来ているほどである。近隣の異教徒たちは、この模範によって大いに感動し、漸次同じ（キリシタンの）掟を抱くように導かれている。

（一五九五年二月十四日付オルガンティーノ書簡）

オルガンティーノは、「山間」で突出した信仰を持つキリシタンを特筆した。「山間」と強い信仰のあり方から、やはり忍頂寺五ヶ庄の人々のことだろう。書簡の続きには「高槻地区」で古くからのキリシタンが教会を再建し、オルガンティーノらが代官をキリシタンにしようと考えるまでになったとある。当時の豊臣政権は、豊臣秀次事件を経て畿内の所領配置を見直し、同年に秀吉近臣の片桐且元が一万石の茨木城主になったとされ、高槻城には同じく新庄直頼が入ったところであった。

「一五九五年度、年報」よれば、「都地方」には司祭三名と修道士五名がおり、絶えずキリシタンらの間を巡回した。イエズス会は京都や大坂で教会を再興し、豊臣政権の武将周辺への布教をはじめている。そして、翌年の年報では大坂の宣教師が巡回を開始し、旧高山氏領もその対象となった。「一五九九-一六〇一年度、日本諸国記」によれば、京都周辺での改宗者は三千四百人を超え、大坂からの宣教師の巡回は続いた。ここでも忍頂寺五ヶ庄のキリシタンが特筆されている。

キリシタンのいる各地、わけても高槻の山地のキリシタンを訪ねるのに、司祭が出向いていく。そこのキリシタンは、先には（高山）ジュスト右近殿の（臣下）であった。そして今は、異教徒の領主たちの下にあり異教徒の間で過ごしているが、最大の苦難の時代においてさえも、初めにキリシタンにならなければ、自分たちの間で決して異教徒を認めようとしないで常に信仰を保っていた。そのキリシタンはいずれも質朴な人人であり農民である。（かつて）彼らは、当初は（カトリック教会の）高位聖職者にあたる仏僧自身によって我らの（キリシタン）宗門を受け入れるように説得されたのであった。すなわち、これら仏僧は（高山）ジュスト右近殿の時代に（キリシタンに）改宗し、信仰のことどもに立派な印象を抱き、ただに（住民をも）説得するだけでなく、デウスの（お計らい）に次ぎ自らの模範と権威によって彼らを（キリシタンに改宗させた）のであった。そのキリシタンたちを司祭たちは継続的に訪問し、彼らすべてのことで大いなる成果と慰めを受けた。

（「一五九九-一六〇一年度、日本諸国記」）

仏僧とは前節で見た清水寺のロケであり、右近の時代の仏僧改宗とは前章で見た天正十一年（一五八三）の茨木城主中川氏との係争に端を発した忍頂寺の焼き討ちに整合する。イエズス会が布教を再開する中、繰り返される特記は、揺るぎない信仰を持っていた忍頂寺五ヶ庄のキリシタンに対するイエズス会の重視をうかがわせるに十分だろう。

（三）領主の再編と能勢氏の「いやいや法華」

慶長三年（一五九八）に秀吉が没した後、関ヶ原合戦を経て、同八年に徳川家康が幕府を開く。全国の所領配置は大きく変わり、摂津では大坂城の豊臣氏と徳川氏による二重公儀体制がはじまる。高槻には徳川方の代官が入って所領安堵や年貢収納にあたり、茨木周辺では豊臣家家老片桐氏の支配が続く。そして、山間の能勢郡では、戦国時代の領主であった能勢一族が大身の旗本として復した。この直後、能勢氏は独自の宗教施策を開始する。本節では、視点を変えてこの動きを取り上げてみたい(24)。

以前の能勢郡は、豊臣家の直轄地として、九州の大名である島津氏の在京賄領一万石が設定されていた。能勢氏は豊臣家に仕えたというが不明な点が多く、前後の動向を示す史料も欠く。しかし、あらためて当主の能勢頼次らが約六千三百石を領することになり、頼次は周辺の六千八百石余を徳川幕府から預かった（「能勢家由来旧記書抜」）(25)。この頼次が熱烈な法華門徒であった。

慶長十年、能勢氏は霊場の能勢妙見山を開き、領内の寺院へ法華（日蓮）宗への改宗を命じた結果、十か村のうち約十五の真言宗・天台宗の寺院が改宗したという。幕府の預り地でも改宗が進むが、今西村（大阪府能勢町）では光明寺（浄土宗）の檀家十九軒が本尊とともに隣村の片山村に移ったと伝える。「能勢のいやいや法華」と称するように、改宗には反発があった。

かつての能勢郡では、高山氏が布教を意図し、前章で見たように短期間で多くのキリシタンが誕生した。今西村の近くには「栗栖」（くるす）という地名があり関連性が注目される。しかし、忍頂寺五ヶ庄のように宣教師が滞在しての布教は確認できず、能勢氏の法華改宗の対象が真言宗・天台宗寺院であったように信仰は続かなかったと考えられる。この宗派の寺院は、忍頂寺と同様、高山氏以前から摂津山間部で信仰を集めた宗派であった。

一方、この時点での能勢氏は能勢郡を掌握する状況にはなかった。これは同氏の問題というよりも、豊臣氏と徳川氏の対立に要因がある。元和元年（一六一五）の大坂夏の陣では能勢周辺で「多田之庄一揆」が蜂起し（「譜牒余録」）(26)、頼次は、丹波の亀山城主岡部長盛（三万二千石）と篠山城主松平康重（五万石）とともに鎮圧に向ったという。

また「能勢家由来旧記書抜」には、徳川家年寄の土井利勝・酒井忠世が頼次に豊臣方に通じた人物の報告と在所に帰った場合には捕らえるようにと命じた連署状、及び能勢一族の伊織のエピソードが採録される。伊織は豊臣秀頼に仕え、大坂の陣では後藤又兵衛に付属した。しかし大坂落城後は能勢復帰が叶わず、丹波で別家を継いだという。能勢郡周辺では豊臣方に与する動きがあり、このような時期に能勢氏による改宗ははじまったことになる。

なお、能勢氏は、元和元年九月以降に地黄陣屋の造営をはじめるが（「能勢家由来旧記書抜」）、豊臣家滅亡後の畿内における徳川方の新たな武家拠点という点では大坂城、高槻城、郡山城（奈良県大和郡山市）への城主配置と並行するものであった。大坂の陣後、徳川幕府は大坂周辺の軍事的掌握を進めており、その一画に能勢郡は位置した。預り地での改宗が可能であったのは、これを幕府も認めていたからだと思う。

関ヶ原合戦の後、忍頂寺五ヶ庄に隣接する能勢郡では、村人らを対象とする大きな宗教環境の変化を新たな領主がもたらしていた。宗教的環境の変化はキリスト教だけではないことにも留意が必要だろう。なお、能勢氏は明治まで存続し、法華宗の信仰は地域社会に展開した。

（四）徳川の禁教と「かくれキリシタン」

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦の後も宣教師は京都、大坂、伏見に滞在し、忍頂寺五ヶ庄のキリシタンへの訪問を変わらず継続した。「一六〇三、一六〇四年の日本の諸事」には、次のようにある。

或る司祭は、キリシタン宗団を訪問し、告白を聞くために何度か摂津国の山地に趣いた。そのキリシタン宗団は、（高山）ジュスト右近殿がその地の領主であった時代からのきわめて古く、日本中で最良のキリシタ

ン宗団の一つである。そして、これらのキリシタンはすこぶる素朴な人たちなので、純粋な心と確乎とした信仰を保って暮らしている折、それらの山林や山地にあってそこにいる異教徒たちの茨にすっかり囲まれたこの上なく清らかな薔薇の花のようである。

（「一六〇三、一六〇四年の日本の諸事」）

「一六〇六、一六〇七年の日本の諸事」にも、宣教師が古くからのキリシタンで模範となる堅い信仰を維持する「山地のキリシタン」を訪問したとある。やはり、ともに忍頂寺五ヶ庄の人々だと思われ、千提寺・下音羽にはこの時代のキリシタン墓碑が残された。千提寺の慶長六年紀年銘「佐保カラゝ」墓碑、同八年紀年銘「上野マリア」墓碑と当該期の「不明氏」墓碑、下音羽の慶長年代の「くほまりあ」、慶長十五年紀年銘「せにはらまるた」、慶長十八年紀年銘「源左衛門」の墓碑である。忍頂寺五ヶ庄の中でも、千提寺・下音羽の信仰が特別になりつつあったことがイメージできる(27)。

徳川幕府は、慶長十七年に幕府領に対するキリスト教禁教令を発し、その適用は全国へと波及した。慶長十九年に高山右近は加賀前田家を離れ、翌年にフィリピンのマニラで帰天する。しかし、以降も一部の宣教師は畿内に留まり、キリシタンの信仰を支えた。チースリク氏によれば、一六三〇年代の音羽村には宣教師の「隠れ場」があり、複数の宣教師が潜伏、休養したという(28)。

一方、下音羽は慶安二年(一六四九)に高槻城主となった徳川家譜代の永井直清の支配となったが、承応三年(一六五四)に京都所司代になった牧野親成からキリシタンに関する書状を受け取る(29)。そこでは前職の板倉重宗が下音羽を治めていた際に作兵衛という百姓をキリシタンと把握したが、吟味の結果は宗門が定まらなかったこと、庄屋に預けた後に病死して寺院に葬られたこと、板倉重宗による調査の帳面を預かっていることなどが伝えられている(30)。

徳川幕府は、下音羽や千提寺における「かくれキリシタン」を把握していたと思われる。この後のキリシタンに関しては断片的に記録が伝わるが、周辺地域を含む形での大規模な弾圧などは行われなかった。「下音羽」の村名が高槻城主宛の京都所司代による書状に登場する点をふまえると、すでに忍頂寺五ヶ庄においても、その信仰は限られていた可能性があるだろう。

四　おわりに

冗長となったが、最後に小文をまとめておわりたい。高槻城主高山氏は支配地域での布教を主導し、能勢郡では短期間でキリシタンが爆発的に増加した。しかし、教義を理解した上での入信には忍頂寺五ヶ庄のように宣教師が一ヵ月滞在するような説教・聴聞機会と期間が必要であったと思われる。後の能勢氏による能勢郡での法華改宗の対象は天台・真言宗寺院であり、能勢では人々の信仰が旧に復していたことがわかる。

人材不足から滞在型の宣教師の布教は困難であったが、宣教師の記録類からは忍頂寺五ヶ庄ではこのタイプの布教が実現した。高山氏にとって同庄は、対立する中川氏との係争地を天正六年に織田政権の裁定で獲得した地域であったが、在地有力寺院の忍頂寺が中川氏と結び、反発を繰り返していた。

後の能勢氏も関ヶ原合戦後の領主再編の中で法華改宗を進めた。両氏による布教(改宗)のタイミングは、領主の再編による新たな在地掌握が必要になり、かつ地域が不安定な時期と重なる。宣教師滞在型の布教は、高山氏が「境目」地域における忍頂寺の否定と住民の掌握を意図し、中川氏当主の戦死というタイミングで寺院破壊とセットで実行された可能性が高い。また、布教という行為には自らが信仰する宗教を通じ、地域住民を掌握する手段という一面を備えたことが想定できるだろう。そして、キリスト教入信の動機は、高槻城主高山氏の動向に伴う権力主導という性格が強かったように思う。

この結果、忍頂寺五ヶ庄では、教義を理解したキリシタンが誕生した。彼らは信仰心を厚くし、排他的な動きを示すなど、キリスト教が村落レベルの結合の軸になっていたことさえ想像させる。結果、豊臣期を含めて信仰は黙認され、イエズス会も早くから特区「山のキリシタン」として扱った。そして、この中に千提寺と下音羽が含まれる。「かくれキリシタン」の成立は、高山氏が傑出したキリシタン大名であったことはもちろんだが、高槻城主高山氏の地域支配をめぐる動向という一面があったことを指摘したい。

さて、天正十五年(一五八七)の伴天連追放令の後、畿内の宣教師たちは

九州への移動を余儀なくされた。この結果、多くの宣教師らが九州の下（肥前国平戸・有馬、肥後国天草など）の布教区に集まったため、キリシタンたちに十分な教化が進む思わぬ効果があったという（「一五八八年度・日本年報」）。この地域では一部の在地勢力が早くにキリスト教を受容したが、むしろ信仰の広がりは豊臣政権下のキリシタン大名小西氏の支配時期にあり、後には島原・天草一揆が起こる。

民衆が信仰を自らのものとし、迫害下でも信仰を続けるためには宣教師という宗教者が必要であった。宣教師が去って時間を経ると「かくれキリシタン」の信仰も本来のものではなくなった可能性が高い。感想めくが、それでも信仰が続いたのは、生活のベースである村が形成されたのが戦国時代であり、その初期にあたるキリシタン＝先祖への祭祀という性格ゆえであったように思う。

小文が扱った範囲は、近世の初頭までである。これ以降の実態や同時期の他宗教の動向など検討する余地は大きく、忍頂寺五ヶ庄でもなぜ千提寺と下音羽でのみ「かくれキリシタン」が続いたのかという理由にふれることはできなかった。また、宣教師が常住した高槻城下町での信仰については全く触れ得なかった。後考を期したい。

【註】

(1)二〇一八年に長崎・天草地方の潜伏キリシタン関連遺産が世界遺産に登録された。「潜伏キリシタン」とは、キリスト教への迫害が厳しくなった江戸時代のはじめに、自らの信仰を隠した人々を指す。しかし研究が進むにつれ、その信仰は先祖の教えを守る性格が強いことがわかってきた。そこで、現在では江戸時代の信徒を「潜伏キリシタン」、キリスト教が認められた明治時代以降もその信仰の形を守ってきた人々を「カクレ（かくれ）キリシタン」と区別する考え方が示されている。宮崎賢太郎『カクレキリシタンの実像 日本人のキリスト教理解と受容』（吉川弘文館、二〇一四年）、大橋幸泰『潜伏キリシタン 江戸時代の禁教政策と民衆』（講談社選書メチエ、二〇一四年）を参照。また、茨木（千提寺）のキリシタン遺物が「発見」されたのは大正九年（一九二〇）と前年の二説があり、記録的には前者となるが、発見者の藤波大超氏は後者を主張した。高木博志「茨木キリシタン遺物の発見」（『新修 茨木市史 年報』第四号、二〇〇五年）を参照。

(2)湯浅治久『戦国仏教 中世社会と日蓮宗』（中公新書、二〇〇九年）、仁木宏「宗教一揆」（『岩波講座 日本歴史』第九巻中世四、岩波書店、二〇一五年）。

(3)高山氏が主導した布教の特徴については、拙稿「高山右近への視点 - 研究整理と基礎的考察 - 」（拙編著『高山右近 キリシタン大名への新視点』、宮帯出版社、二〇一四年）、拙著『戦国摂津の下克上 高山右近と中川清秀』（戎光祥出版、二〇一九年）を参照されたい。

(4) 中世の千提寺・下音羽を含む忍頂寺五ヶ庄については、井藤暁子「千提寺・下音羽のキリシタン信仰」「中世の忍頂寺五ヶ庄の名主層」「車作の清水寺縁起」（財団法人 大阪府文化財調査研究センター『大阪府茨木市・箕面市所在 彩都（国際文化公園都市）周辺地域の歴史・文化総合調査報告書』、一九九九年）、同「茨木キリシタン遺跡発見90周年 - 茨木キリシタン遺跡の成立に関わる「フロイス日本史」清水寺ロケの実像 - 」（坪井清足先生の卒寿をお祝いする会『坪井清足先生卒寿記念論文集 - 埋文行政と研究のはざまで - 』、二〇一〇年）が詳しい。

(5)フーベルト・チースリク「高山右近領の山間部におけるキリシタン - 布教・司牧上の一考察」（キリシタン文化研究会編『キリシタン研究』一六、吉川弘文館、一九七六年）。

(6)註4井藤「千提寺・下音羽のキリシタン信仰」「中世の忍頂寺五ヶ庄の名主層」「車作の清水寺縁起」「茨木キリシタン遺跡発見90周年」。

(7)高山氏の権力動向については、註3拙著を参照されたい。以下、特に断りのない同氏の動向や評価はこれに拠る。

(8)以下、個別出典は取り上げないが、註記の無い限り宣教師の書簡については松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』（同朋舎出版）、フロイス『日本史』については主に松田毅一・川崎桃太訳の中央公論新社（文庫本）に拠る。

(9)天正十年六月廿七日付柴田勝家他三名連署書下（塚本文書）。

(10)註5チースリク論文。

(11)井藤暁子氏も同様の見解を提示している。註4井藤「茨木キリシタン遺跡発見90周年」。

(12)註5チースリク論文。

(13)年未詳七月廿三日付高山右近書状（「壽命院文書」）。

(14)和田氏と池田氏の評価については註3拙著、また郡山合戦（白井河原の合戦）に関しては、拙稿「高槻城主 和田惟政の動向と白井河原の合戦」（『しろあとだより』第7号、高槻市立しろあと歴史館、二〇一三年）を参照されたい。

(15)佐久間正翻訳、フーベルト・チースリク解説・註「コリン著の高山右近伝」(キリシタン文化研究会編『キリシタン研究』一七、吉川弘文館、一九七七年)。
(16)高山氏の支配が及んだ地域の寺社には、右近の「焼き討ち」伝承が残り、忍頂寺寿命院の縁起も同様である。一方で、焼き討ち伝承を持つ本山寺と安岡寺(ともに大阪府高槻市)に対し、やはり高山氏は寺領保証の文書を発給していた(「本山寺文書」「安岡寺文書」)。このため、チースリク氏は焼き討ちを否定的にとらえ、キリスト教拡大に伴う自然衰微や布教の展開を主張する宣教師のスローガンと理解する(註5)。また、山下洋輔氏は右近の寺社破壊は公権力確立過程の寺社統制策で、禁制や寺領安堵とは矛盾しないと解釈する。同「高山右近の寺社破壊に関する一考察」(『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』一五-二、二〇〇八年)。ただし、忍頂寺の破壊は対立する中川氏との「境目」の掌握を目的とした在地掌握が破壊と周辺地域でのキリシタンの展開という形になったものであった。焼き討ちと寺領安堵は時期差の問題で、公権力という概念も設定が難しい。この高山氏の焼き討ちについて、地域の寺社という異なる視点から読み解いたのが富井康夫氏である。大正十一年(一九二二)刊行の『大阪府全誌』によれば、右近の焼き討ちを受けた寺社は島上郡で十の寺院と四つの神社、島下郡で三つの寺院であり、寺院の宗派では天台宗が三、真言宗が二、禅宗が五、浄土真宗が三であった。かつ浄土真宗は一寺院に異説があり、残る二つは伝承が不明確であった。一方、当該期に浄土真宗や法華宗の寺院には創建、中興が伝承されていた。そこで、富井氏は伝承が天台・真言宗や禅宗という中世的宗教に偏り、これらが衰微を経て江戸初期に再興という共通性を見出す。浄土真宗や法華宗は、戦国時代に民衆の信仰を受けて興隆した戦国仏教であり、高山氏の支配下でもその伝承が残されたことは注目に値する。なお、近世高槻城下町の「寺町」に所在する三つの寺院のうち、光松寺(西山浄土宗)は元和三年(一六一七)の徳川幕府による城郭修築時の城主土岐氏による移転伝承と、永禄年間(一五五八~七〇)の高山氏による移転伝承を持つ(『明治初期村誌集編』)。富井氏によれば、焼き討ち伝承とは徳川幕府からの支援を引き出す「説話」であった。地域史をふまえた解釈として、強い説得力がある。詳しくは富井「高山右近の謎」(『新いにしえ物語』、高槻市、一九九五年)を参照されたい。
(17)天正十三年九月十□日付羽柴小吉秀勝書状(「安岡寺文書」)。
(18)註5チースリク論文所収。
(19)註5チースリク論文。なお、安威重胤の諱は「了佐」「守佐」「之統」などとされてきたが、「重胤」が正しい。馬部隆弘「織豊期の茨木」(『新修 茨木市史』二、二〇一六年)を参照。
(20)註3拙稿及び拙著。
(21)註4井藤「車作の清水寺縁起」「茨木キリシタン遺跡発見90周年」。
(22)前後の武家権力の動きについては、註19馬部論文を参照。
(23)ただし、「一五九一、一五九二年度・日本年報」では、ロケは堺に病院を設け、各地から来た癩病者を看護して洗礼を授けたとしか記されていない。一方でジョウチンは「高槻の地には、シメアン(・デ・アルメイダ)修道士が葬られていた。(ところで)異教徒たちは、その墓を破壊し、遺骨をあちらこちらに撒きちらした。ジョウチンはこれを聞くと、かのトビアスのように、誰もはばかることなくふたたびその遺骨をすべて集め、異教徒たちの雑言をも物ともせず、一つの箱に納めて埋めた」という。高槻のキリシタン墓地には外国人修道士が埋葬され、そして破壊を受けていた。この墓地の候補には、発掘された高槻城キリシタン墓地があがるだろう。
(24)以下、山崎隆三「秀吉・家康政権下の能勢」(『能勢町史』第一巻・本文編一、二〇〇一年)を参照。また、能勢氏の軍事的動向については、馬部隆弘・中西裕樹他「大阪陣屋サミット-陣屋の魅力と歴史的解釈-」(このうち中西執筆の「地黄陣屋」の項。『大阪大谷大学 歴史文化研究』第19号、二〇一九年)。
(25)『能勢町史』第三巻・資料編(一九七五年)所収。
(26)『能勢町史』第三巻・資料編(一九七五年)所収。
(27)キリシタン遺物の評価を含めて、桑野梓『茨木のキリシタン遺物—信仰を捧げた人びと—』(茨木市教育委員会、二〇一八年)を参照されたい。
(28)フーベルト・チースリク『キリスト教の証し人』(聖母の騎士社、一九九五年)。
(29)年未詳八月廿八日付牧野親成書状(「永井家文書」)。
(30)前後の動向は註4井藤「茨木キリシタン遺跡発見90周年」が詳しい。

発行日 二〇二一年三月三十一日 **編集・発行** 高槻市立しろあと歴史館
大阪府高槻市城内町一番七号・TEL〇七二(六七三)三九八七
◆ホームページ:高槻市ホームページ「インターネット歴史館」内で掲載
http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi_kanko/rekishi/rekishikan/chosa/shiroato/shiroato_dayori/index.html